

# 齋藤先生と子どもとぼく



平井信義

齋藤文雄先生が、突然、帰らぬ人となられた。それも、苦勞してまどめられた国際結婚の、その結婚式場で演説されている時だと言う。先生は、全くの世話好きだった。「よせばいいのに」と、ぼくら弟子どもは何回も思ったことである。しかし、先生のお世話で、たくさんの方が幸福になったことも知っている。実は、我々の児童学科も、先生のお世話が大きな蔭の力になっている。故倉橋先生、牛島先生、そして齋藤先生が、児童科の創設に当られた。当時、何か先生からのご相談をうけ、ご苦心を察したものだ。

それ以来、齋藤先生には児童科の講師をお願いしていた。全く正直に、朝早い時間、講義のために円タクで乗りつけられた日々のことを思い出す。それは、実直そのものと申し上げた方がよい。学生にも、一人ひとりに親切であった。何人かが親しく先生のお世話になっていた。それを余り口に過ぎらなかったで、あとから知って

驚いたようなこともあった。本当の世話好きであった。

実は、この二月のことであったが、先生から講師を止めたいというお手紙をいただいた。どうも体に自信がないから——ということであった。ぼくは、早速自宅に参上し、もう少し継続して頂くように願った。しかし、「一回頻脈となると、三—四時間つづくのだよ」と言われ「聖ルカ病院の方でも、重い仕事が重なったのでね、それが片付いたらまた行きますよ。それまで待って欲しい」ということであった。お断りではなかった。待っていて欲しいということであったのだ。ぼくは、先生の世話好きと実直さがお体を傷めているのだと知りながら、なお懇請する気持が動いたけれど、やはり、お体のことを考えるべきだ———と思い決めた。それでは、「一時、お待ちします」と答えた。先生は、本當にほっとされたようであった。

先生は、ぼくにとっては、師としてこわい存在だった。そのこわ

さは、昔の小学校生が受け持ちの先生に対するのに似た感情であった。夏など、軽井沢のご別荘に伺い無駄語をする機会に恵まれながら、ぼくにはやはりこわいという気持がいつも強くあった。その大きな理由は、先生の実直さにたいして、ぼくは余りにもずぼらであったからだと思う。先生の实直さは、細々したことにまでよく行き届いていた。

それは、幼い子どもを扱われる時にもはっきりと現れていた。外来や病室などでも、子どものおしめについている細い小さな毛を、そっととっておやりになったり、髪の毛についているごみを払ったり、ちょっとしたただれがあると、いねいに油をぬったり——われわれの気のつかないことばかりであった。子どもの年令が少し大きくなると、「走っちゃいけませんよ」「ここにさわらないようにね」などと、その注意もまた、細々していた。ぼくは、「いやんなっちゃうな、あんまり細かくて」と、ぼやいたりしたが、ぼくの論文原稿に手を入れていただいたものなど、一字一句の見落しもなく訂正されているのを見ると、何度かハッとして赤面した。それは、終始一貫していた。何回か先生の原稿を見せていただいたことがあるが、柵目の中に一字一字整然としているのに驚いてしまった。

外来での先生のお姿が、いちばん多く浮んでくる。当時、若かったぼくには、好きなタイプの母親と嫌いなタイプの母親とが、かなりはつきりしていた。何人か、殊のほか嫌いな母親がいて、その人たちが育児相談にくると、へきえきした。そして、怒気を含んで叱

ったりしたこともあった。ところが、先生の側で処方を書いていた時に、その母親が子どもを連れて診察を受けていたことがある。その母親は、相変らず思い上っていたし、しつっこくもあり、先生にたいしても明かにそのような態度を示していた。先生のお顔をじっと見ていると、一瞬、怒気が現れたのを感じた。しかし、すぐにそれを抑えられて、じっと母親の訴えることに耳を傾け、そのあと懇々と子どもの育て方について、説明をされるのであった。その母親は、すっかり先生が好きになった。満足したように外来を出ていった。先生も、うれしそうだった。

何といっても、先生は実直であった。その実直さが利用されている——と感じたことがしばしばあった。「もっと、お断りになればいいのに——」と進言したこともあった。「そう思っているのだがねえ」とおっしゃりながら、頼まればそれを引き受け、きちっと実現しないと気がすまないようであった。

この巻頭言も、実は、斎藤先生がお書きになるはずであったという。亡くなられたのが四月八日であったから、約束日を守る先生の胸中には、この原稿の案は既にできていたのではないかと思う。実直な先生の巻頭言に代って、ずぼらなぼくが追悼を書くようになったのを、先生は天上からどのように見ておられるだろうか。先生のお姿は、ぼくの心の大切な部分に、いつまでもどっかりと坐って、ぼくをじっと見詰めたにちがいない。